神保美佳のメモ★ランダム ――― VOL.40

いま「羽根物」を楽しんでます

MEMO★RANDOM

じんぼう・みか
法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。
取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」（バジリコ、07年）

今、久しぶりに「パチンコに夢中」な状態に陥っています。…こんなことを書くと、依存症の気があるのではないか？などと思われるかもしれませんので、ちょっと言い換えますと…「パチンコの面白さに夢中」な、状態になっているのです。

パチンコの面白さとは何かと聞かれれば、人によって答えは異なるでしょう。例えば今でしたら「図柄がピタッと揃う瞬間」だったり「期待できる演出が次々出て来る様子」だったり。私の場合は、やはり「玉と釘そして役モノが作り出す、目で見て楽しめる動き」に他なりません。そしてそれに該当するのが、規則改正前「二種」と区分けされていた「羽根物（＝飛行機などと呼ばれることもあります）」であり、最近そのジャンルが再び脚光を浴びつつあることが、非常に嬉しいのです。

私が初めてパチンコを打ったのは1985年頃で、ちょうど保通協検査が始まっていた時期でした。保通協適合第一号『レッドライオン（西陣）』をはじめ、大当たり中にメロディーが流れる（当時は珍しい）『アリゲーター（SANKYO）』、イルミネーションが美しい『エアープレーン（平和）』といった、初期の羽根物たちは私にとっても忘れられない存在ですし、貯留機能が付いた『ビッグシューター（平和）』やコミカルな西陣の機種たちも、わくわくさせてくれました。

しかし91年の規則一部改正によって、二種の上限出玉がデジパチ（一種）と同じぐらいに引き上げられたため、逆に差別化が図れず衰退して行ってしまった…という流れがあります。出玉が少なめの遊べる羽根物も確かにあったのですが、射幸性が高めのCR機などに押され、気が付けば設置台数は見る見る減り、遂に年間で1機種出るか出ないか…といった状況にまで陥りました。

私自身も、以前はどこのホールでも気軽に打てた羽根物が、最近では電車に乗って行かねば打てないことに、だいぶ焦燥感を覚えていました。しかしここ数年、1円コーナーをはじめとする「遊べるパチンコブーム」とでもいうべき流れから、羽根物タイプの見直しも起こって来ています。平和の『CRAトキオデラックス』や『CRAネオビッグシューター』によってヒット機種のリメークブームに火がつき、SANKYOやニューギンなどからもリメークものが発売されて設置店も増えていますね。

実はこのコラムを書いている前日も、羽根物を楽しんで来たのですが、4円コーナーでもお客さんの付きがいい。また、近所のホールで遊べる気楽さもさることながら、打っている年配客の懐かしそうな表情を見ていても、嬉しい気持ちになって来ます。確かにニーズは廃れていないのです。いやむしろ、今最も求められている楽しさが「玉や役モノの動き」にあることは間違いなく、客離れが深刻なパチンコを救うヒントになるかもしれないと思い、ブームを注視しているのです。

保通協適合一号機の羽根物『レッドライオン』（西陣＝ソフィア）▶
昭和60年の大ヒット機種